
向日葵。

きみ唄。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

向日葵。

【ZPDF】

Z97570

【作者名】

きみ限。

【あらすじ】

不思議な力を持った少年と、病気の少女。

病気な少女に会った少年が成長していき、最後に大切なものを見つける話です。

向日葵が咲き始める季節。僕はいつもどおりに、友達のお見舞いに行っていた。

「お前、進路は決まったのか？」

たまに聞かれる、将来のこと。僕はやりたいことなんてとくになく、ただなんとなくすごしているだけ。

ただ、僕は他人のことができないことが出来る。
科学的にはありえないが、つぼみや葉から、花を咲かせることがで
きる。

……もう、こんな力なんて使いたくない。

そう思いながら、病室から出て帰ろうとしていた。その帰り道、ドアの開いている病室にふと目がつく。

中には、一人の少女がいた。少女は窓の外を眺めている。その横
顔は、とても消えそうなくらいはかなかった。

「何を見ているの？」

僕は、つい声をかけてしまった。少女は驚きながら、僕を見て笑いながら言つ。

「向日葵を、見ていたの」
「向日葵？」

「ええ、そう。私、向日葵が大好きなの。強くて、大きくて、太陽に向かつてまっすぐに伸びてる。私は向日葵のように強くなりたい

なあ……

そういう彼女の病室からは、咲いていない向日葵が見えた。

彼女は思い病氣で入院しているらしい。話を聞くと、あと少しで手術があるそうだ。
彼女の話を聞いているうちに、僕は彼女にどんどんひかれしていくのを感じた。

出会ったあの日には、彼女はこう言っていた。

「私、ここから出られないの」

「……どういうこと?」

彼女は、この病室から出られない。彼女の病室のドアは、透明なビニールでおおわれている。

重度の白血病で、外の細菌が体の中に入ってしまうと死んでしまうという病気だった。

病室は個人部屋で、本だなが一つあるくらいのさみしい部屋。なのに、彼女は必死に生きようとしていた。

そんな彼女に比べて、僕は何をしているのだろう。

花を咲かせる力はどうの昔に止めてしまった。あの力は、僕には重すぎたんだ。

「ねえ、知ってる? 向日葵の花言葉は、あこがれや愛をさすんだつて。それには、向日葵の由来は太陽の動きにつられて、その方向を追うよにして花が回るからなんだよ」

「へえ。花言葉が愛だなんて初めて知ったよ。夏にプロポーズするときは、向日葵がいいのかなあ」

「……誰かに告白、するの?」

「まさか！　ただの例えだよ」

ソーシャルして毎日のように友達のお見舞いの帰りに、彼女の病室によつていた。

日をあげことに彼女のことによく知つていぐ。それと同時に、もつと知りたくなつた。

彼女は、日ひ日にちつれていぐ。

それでも彼女の生きようとする力強い日だけは変わつていなかつた。僕と彼女の違うところは、目標に向かつて頑張り続けていくこと。（変わりたい……）

彼女といふことで、ある日僕はそう思つた。

力を使つことで、何かが変わるのだろうか……？
少しの可能性を信じて、いつ使つたかなんて覚えていないこの力を、使つてみることにした。

家にあつた、チューーリップのつぼみ。それを持ち、僕は願つた。

（咲け、咲け、咲け）

……花はつぼみのままで変わらない。こんなことは初めてだつた。

「何でだよー？」

何度も願つても、となえても。チューーリップはつぼみのまま、何も変わらなかつた。

(何で……？)

僕はわけが分からず、その場に座り込んだ。

今まで、普通にすぐに咲かせることができたはずだ。混乱していると、

プルルルル、プルルルル、

電話がなった。僕は混乱したまま、受話器をとった。
かかってきたのは、彼女の母親からだ。頭が一気に冷えていくのを感じた。

電話の内容は、僕が恐れていたことだった。

「容態が、急変した……？」

受話器からは、彼女の母親のすり泣く声と、さわがしい周りの音がしていた。

「あなたを呼んでいるの……。お願い。来てあげて」

僕は電話を放り投げてすぐに病院へ向かった。

彼女は、体中を管ににつながれていた。苦しそうにして、僕を呼んでいる。

「もう、時間がないみたいなの。手術は明日になるみたい……。お願い、手術が終わるまでは、一緒にいてくれない？」
心臓がキュッとしめつけられるような感覚におちいった。

「僕は、ずっと君を見ているから。どこに居ても、必ず
彼女は泣きそうな顔をして、僕を見ていた。

次の日、僕は眠れずにつづと彼女のことだけを考えていた。
僕が彼女に出来ることはなんだ。……いや、分かっているはず。
僕は彼女のために、精一杯の、出来るだけの応援をするしかないん
だ。

そう思い立った僕はすぐさま、病院の窓から見える向日葵畑に向
かって走っていた。
時間がない。病院に行くまでに、自転車を倒したことも、誰かに
ぶつかることなんかも、まったく気がつかなかつた。

向日葵畑が見えてきた。腕時計を見る。

あと十分

向日葵は、咲いていない。僕は向日葵に向かい、大きく手を広げ
て彼女のことだけを考えた。
そして、叫んだ。

「大きくなれ、大きくなれ、大きくなれ、大きくなれ、大きくなれ、大きくなれ
！」

声が枯れることなんて気にせず、汗をぬぐうこともせず、ひたすら願い、叫んだ。

向日葵は徐々に、伸びていく。

向日葵はくきを伸ばして、ぐんぐん大きくなつていった。僕は気分が好調して、さらに叫ぶ。

「大きくなれ、大きくなれ、大きくなれ大きくなれ大きくなれえええええつ！！」

向日葵を見ると、それは僕の身長をこしてとても大きくなつていた。何分たつたかも分からぬ。僕はそれくらい、時間を長く感じた。息を切らせながら、僕は彼女の居る窓を見上げた。

彼女は驚きと喜びの混ざつた顔をして、僕を見つめていた。彼女は外の空気を吸つてはいけないはずなのに、窓を開けて身を乗り出していた。

後ろからあわてて母親が止めている。そんな母親のことを彼女は気にしていないようで、僕に向かつて叫んだ。

「私、頑張る！ 頑張るから……っ、本当に、ありがとう……」

彼女は泣きそうな顔で、きれいに強く笑った。

向日葵が一面に咲いている例のところに、僕と彼女はいた。

「手術、成功してよかつたね」

「君のおかげだよ。この向日葵を咲かせてくれたのは、君なんだか

「う

僕らはクスクス、と笑つて手をつないだ。

「僕、忘れていたんだ」

「え？」

「この力、ずっと使つていなかつたんだ。……昔は、皆が喜んでくれるから咲かせていたんだよ。でも、小学校に入つてから気味が悪いつて言われちゃつてさ」

彼女は僕の目を見つめて、真剣に話を聞いてくれている。
そのことに安心して、僕は話を進めた。

「たぶんね。この僕の花を咲かせる力は、誰かのために使おうと思ふことで發揮されるんだと思つ。……忘れていた。これを思い出すてくれたのは、君だよ。

「ありがとう」

彼女は笑う。
僕も、笑う。

彼女のおかげで、僕は誰かのために必死になることを知った。
僕は、何か変わったかな。

僕の手が強くにぎられた。僕も、にぎり返した。

僕は向日葵のように、強く根をはって、大きく畠を見守つてい
たい。

向日葵の花言葉を教えてくれたのは、君だつてことを忘れないで。

病院にいた友達にいつも聞かれる、進路のこと。今はまだ決まつ
ていなけれど、やりたいことは見つけたんだ。

向日葵も、空も、君も。

昔の僕が見ていたじゅうよつも、とてもきれいに、輝いているかの
よつに見えた。

(後書き)

文才はまつたくないです。『めんなさい』。（泣

少年の気持ちと、気持ちの変化に気がついてくれたら嬉しいです。
大切なるものや、必死になれるものができたらいいなあと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9757o/>

向日葵。

2010年11月18日01時01分発行